

強迫的心性が心理的負債感に与える影響の検討

—機能不全家族における家庭内役割に着目して—

19005FRM 榎田 千英

Ⅰ. 問題

1. 機能不全家族(Dysfunctional family)

家族の機能状態は、子どもの抑うつ感、神経症傾向、青年期の不安状態など、特に子どもの精神的健康との関連性が指摘されている(西出・夏野, 1997; 鈴山・徳田, 2009; 高橋, 1998)。十分に機能している場合、子どもはその家族関係ないしは親子関係を基盤として、健全な対人関係を構築することができるが、そうではない場合、思春期を経て、青年期あるいは成人期を迎えて社会に出た際に、対人関係に支障を来すようになる。そのような家族は機能不全家族と称されている。

2. 過剰適応

過度に他者の期待に応えるために過剰な努力をする、自分を抑制して他者に合わせるなどの傾向を併せ持つ概念に「過剰適応 (Over-Adaptation)」がある(新井田, 2014)。水澤(2014)より、青年期から成人期へと移行する過程において、受動的なものから能動的なものへと変容していく可能性が示唆された。またその背景にあるのが「強迫的心性」であり、強迫的心性によって過剰適応が強化されているという見方が強くなった。

3. 強迫的心性

青年期はライフサイクルの中でも特に強迫的な心性が活性化する時期で、高まる衝動性に対する「防衛」といった意味合いを持った、一つの発達課題としても捉えられる。河野(1987)によると、ストレスを受けやすく、またストレスを産生するように行動しやすいだけでなく、ストレス緩和が下手なので、心身症を発症しやすいと言われている。その理由として、他を意識し、他者の思惑を気にしながら、後ろ指をさされないために受身的に過剰に適応するため

あることが考えられる。

4. 心理的負債感

心理的負債感とは、互酬性の規範あるいは互惠規範の存在を前提としており、援助者に返報の義務がある状態 (Greenberg, 1980) を意味し、他者からの好意や援助に対する負い目の感覚(相川・吉森, 1980)であると定義づけられる。過剰適応者は実行されたサポートは得られているものの、心理的負債感が高いことから、実行されたサポートの適応的な影響は受けられていない可能性が示唆されている。

5. 本研究の目的

機能不全家族における家庭内役割の観点から強迫的心性と心理的負債感との関連を検討することを目的とする。

Ⅱ. 研究 1

1. 目的

本研究では強迫的心性によって心理的負債感から喚起されるものであると予測し「強迫的心性の高い人は完璧な自己を求めており、他者の評価や思惑を意識する行動を取る動機づけがされやすくなり、心理的負債感が高くなる」という仮説に基づいて検討を行う。

2. 方法

分析対象者：私立 A 大学に通う大学生 16 名(男性 7 名, 女性 9 名) 大学院生 17 名(男性 2 名, 女性 15 名)を対象とした。

質問紙：①強迫性格尺度(関山, 2008), ②心理的負債感尺度(相川・吉森, 1995), フェイスシートは性別, 年齢, 学年を該当するものから選択してもらった。

3. 結果

サンプル数が不足しており因子分析できなかったため、尺度の因子そのままを使用し、「完全追求」「わがまま」「正義感」「非妥協的」の全部

で4因子構造とした。また、一方の心理的負傷感是一次元の尺度であるため「心理的負傷感」とした。強迫性格下位尺度と心理的負傷感において、性別を独立変数とする t 検定を行ったところ、強迫性格尺度において、「完全追求」($t(31)=1.05, ns$), 「わがまま」($t(31)=-.84, ns$), 「正義感」($t(31)=.92, ns$), 「非妥協的」($t(31)=2.87, p < .05$), 「心理的負傷感」($t(31)=1.23, ns$) となり、「非妥協的」においてのみ女性よりも男性の方が有意に高いことがわかった。重回帰分析を行った結果、そのうち、「完全追求」および「非妥協的」と心理的負傷感に有意な正の傾向を示した ($\beta = 3.49, p < .10$; $\beta = 3.31, p < .10$)。これらから、強迫性心性が心理的負傷感に影響を与えている可能性が示唆されたため、仮説の一部は支持された。しかしながら、この結果は先行研究とは異なっている。また、有意な影響が見られなかった「わがまま」が低いにもかかわらず「心理的負傷感」が高くなっていたり、尺度得点全体で検証したところ、強迫性心性が低くても心理的負傷感が高くなったりしており、使用尺度の妥当性を含めた再検討が必要である。

III. 研究2

1. 目的

研究2では、研究1では明らかに出来なかった個々の生育環境に重点を置いて検討する。「強迫性心性が高い人は低い人に比べて家庭環境において従うことを強要され、文句を言わずに意味を見出して従ってきた経験が多い」「心理的負傷感が高い人は低い人に比べて、求められた役割への自己評価が低い」いうように、家庭内役割や期待に対する評価の視点を加え、検討することを目的とする。

2. 方法

個別面接調査への協力に同意した対象者17名(男性2名、女性15名)のうち調査者と関係が深い4名(男性1名、女性3名)を除く、13名(男性1名、女性12名)に対して個別に面接を行った。

手続き：研究協力者に対し、Zoom ミーティングにて半構造化面接を行った。質問内容は、始めに家族構成、きょうだいの年齢差、居住状態の3点を確認した上で、家族内役割と家族内葛藤場面、家庭内での立場や状況、家族からの期待の有無、家族からの期待や要求に対する評価などの質問をした。研究説明書は質問に入る前にも、調査者が再度同意と倫理面を重点的に読み上げることで、確実に伝わるようにした。同意書の代わりに同意場面の録画を取らせてもらうことを理解していただいた上で、録画を開始しするなどの倫理的配慮のもの行われた。

分析方法：機能不全家族の条件に適合するのが一事例だけだったことから、この事例について他事例との比較検討することとした。

3. 結果と考察

検討した結果、対象事例のみが母子家庭でもきょうだい無しのため、他事例と比べてそもそも家族機能が弱い。また家庭内役割も異なっており、他事例では家事手伝いと回答しているのに対して、対象事例は家事そのものが役割になっている。また、家族からの期待や要求が過度であるにも関わらず、自己評価が低く自分が悪いとして、責任の所在を一手に引き受けていることが明らかになった。

対象事例以外にも機能不全家族の特徴を有している事例もいくつか存在したが、自分のやりたいことがやれていることから、期待への応答性を高く評価していることで回答が大きく分かれた。

IV. 総合考察

研究1と研究2から、強迫性心性が有意に心理的負傷感に正の傾向を及ぼしており、また強迫性心性は家族機能や家庭内役割によって形成され得る可能性が示唆された。しかし、群分けできておらず研究1と研究2の関連性が低く、心理的負傷感には道徳心と繋がる面があるため、機能不全家族以外の家庭で育った人とは分けて考える必要があるのではないだろうか。そのためにはサンプル数を増やし、尺度の妥当性の再検討した上で調査を行う必要がある。